



KITAMURA Yukihiro

肥満細胞の研究に従事するきっかけ

神戸 本日は、肥満細胞の研究に携わる私にとって偉大な先達である北村幸彦先生、中畑龍俊先生のお二人に、研究者として歩んでこられた道や、研究への思いなどをうかがいたいと考えています。まず始めに、先生方が肥満細胞の研究に入られたきっかけからお聞かせください。

北村 私が肥満細胞の研究を始めたときは、肥満細胞について何も知りませんでした。もともと造血幹細胞の赤血球や顆粒球への分化を調べていたのですが、同じ研究をしている人も多いため、方向転換を考えていました。そして1年間の英国留学後、図書館で本をばらばらと見ているとき、たまたまベージュマウスの肥満細胞の顆粒が大きいという論文の電顕写真を見たのです。当時はまだ、肥満細胞が骨髄由来であることはわかっていませんでした。しかし、似た性質のマクロファージは骨髄由来の造血幹細胞から分化してくることはわかっていたので、肥満細胞もそうなのではないかと考えて、この論文にあった巨大顆粒をマーカーとして調べてみることを思いついたのです。それが私の肥満細胞研究のスタートでした。最近は皆さん忙しくて、論文はコンピュータで検索するものになっていますが、時々図書館へ行って、自分の研究とは関係のない雑誌を読むのもいいんじゃないかと思っています。

神戸 ベージュマウスの骨髄細胞を移植すると、ベージュ型の顆粒をもった肥満細胞が認められたという論文¹⁾です

ね。中畑先生のきっかけはどのようなものでしたか。

中畑 私は北村先生の1年先輩にあたる小川真紀雄先生(サウスカロライナ医科大学教授)のところに留学し、造血前駆細胞の解析をしていました。未分化な細胞でのみ構成されるコロニーがあり、それを培養するとさまざまな血球ができてくるのですが、その中に肥満細胞が混じっていることがわかりました。植え直してもやはり肥満細胞が出てくることから、肥満細胞が造血幹細胞の子孫であることを確認しました。当時は肥満細胞は結合織由来であり、血液の細胞ではないとされていましたから、この発見をしてから2~3日は夜も眠れないほど興奮しました。それで小川先生の下で“Nature”に投稿する論文を書き始め、送ろうとしたまさにその日の朝、北村先生の論文が“Nature”に掲載されたのです。

神戸 そうだったのですか！

中畑 エディターが「こんなにエレガントな実験はない」とベタ褒めしていました。小川先生は常日頃から、日本人の血液学者として北村先生を最も尊敬しているとおっしゃっていて、この時も「北村先生が出されたのなら仕方がない」と言われ、私の論文は結局“Blood”に送りました²⁾。それが私の肥満細胞研究の始まりです。

神戸 肥満細胞が骨髄由来の細胞であることは、同じタイミングで見つけられていたのですね。



KAMBE Naotomo